

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 萬屋 博喜

萬屋博喜氏の論文「因果と自然—ヒューム因果論の構造—」は、18世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒュームの哲学を主題として、ヒューム哲学の核をなす因果論について、最終的にそれはある種の「論理」を構築しようとする議論であったことを解明する試みである。そのことは、ヒューム因果論を意味論的な観点から読み解くという、ユニークな視点から遂行される。その際、人間の「自然」に由来する、対話や談話という言語的振る舞いがヒュームの「論理」に固有の役目を果たすことが強調される。全体として、ヒューム因果論という、西洋哲学史上最も著名な議論の一つについて、テキストの緻密な分析を踏まえつつ、現代哲学の成果を適用した形で、新しい描像を浮かび上がらせようとしている。

萬屋氏の議論は、まず第1章において、ヒューム因果論には、「理性的な帰納推論」と「非理性的な因果推理」という二面性が見取られることの指摘から始まる。ヒュームは、理性的な帰納推論の正当化はなしえないとする懐疑的議論を提起したが、それと同時に、因果推理に関して正当と見なされるものがあると論じる。萬屋氏はこれを「整合性問題」と呼び、非理性的な因果推理に関する正当化というのは「プロセス信頼性主義」と現代において呼ばれる外在主義的な正当化なのだ論じる。つまり、私たちの因果推論は、それが自然の行程に対応する習慣に基づくがゆえに正当なのだ、という議論である。これを承けて第2章では、こうした正当化概念の成立過程を解明すべく、帰納推理に不可避免的に伴われる「蓋然性」について、「客観的ベイズ主義」という、現代認識論において提起されている立場をヒュームの議論の中に読み取る作業を、ヒューム自身のテキスト的証拠を引きつつ、展開していく。そして次の第3章において、萬屋氏は、正当化された因果推理が備えているところの「必然性」について、「精神の被決定性」としてそれを規定したヒュームの議論を、「傾性説」として読み解くというように論を展開していく。このことは、必然性と偶然性という対比を解明することからも確認される。第4章で、萬屋氏は、偶然性に対する法則性という形でこの問題を捉え返し、ビーチャムとローゼンバーグによる解明を検討しつつ、「数量化可能性の条件」をヒュームのテキストに見取ることによって、「傾性説」の内実を明らかにしていく。そして続く第5章で、いよいよ因果的理解の意味論的考察に進む。萬屋氏は、いわゆる「ニュー・ヒューム論争」に沿いながら、ヒュームのテキストの中に、「原因」という語に関する「意味の使用説」の可能性を読み取っていく。最後に第6章において、懐疑論の問題を扱い、ヒュームの懐疑論は、実は人間の自然本性によって無力化されることを、探究の論理から情念の論理へという視野の中に位置づけ、ヒューム因果論の「論理」の可能性を描く。

以上の萬屋氏の議論は、総じて、現代的視点をヒューム因果論の中に読み込んでいくというものであり、テキスト上やや意識的になりがちな点は散見されるが、大変に緻密かつ野心的であり、博士（文学）の学位に十分に値すると判断される。